

私の自己成長と言葉を通じて広がる世界 ―台湾留学報告書―

氏名	森山煌大
学部/研究科・学年（留学時）	法文学部/人文社会学科人文学履修コース・2 年
留学国名	台湾
留学期間	1 年
実施年月	2024 年 9 月 1 日～2025 年 6 月 22 日

1. はじめに

この度、私は台湾の国立政治大学に 2024 年 9 月から 1 年間留学しました。留学を通して体験したこと、現地の人々との交流を通して新たに得られた学びについてご報告させていただきます。留学にあたり愛媛大学学生海外派遣(長期)プログラムという奨学金制度を申請しました。そこで国際連携支援部の方々のご協力、並びに愛媛大学からのご支援を賜れたことにより充実した留学生活を送ることができました。留学に際しご助力くださった皆様、今一度心より感謝申し上げます。

2. 留学をしようと思った理由

私が留学を決意した理由はまず中国語を話すスキル・聞くスキルを実践レベルにまで伸ばしたいと考えたからです。大学 1 回生の頃に中国語を学びました。その理由として中国・台湾は政治面・経済面の双方において国力を伸ばしており、日本との交易も今後深まっていくことも視野に入れ学んでおくべきだと考えたからです。そうして必死な思いで学んだ中国語を机上の勉強だけで終えてしまうのはもったいない、生の中国語をもっと知ることによって将来中国語を用いて活躍できる機会を増やしたいと強く思いました。インドネシアに 2 週間ほど研修授業に行ったこともあり英語への自信が少しついていたため海外に行くことに対する抵抗感が下がっていたことも大きな要因でした。なお中国ではなく台湾を選んだ理由は台湾が日本人に対して友好的であり、日本人に対する差別問題も少なく留学に集中することができるのではないかと考えたためです。

また日本語・中国語を問わずコミュニケーション能力を磨きたいと思ったことも目的の一つです。留学以前は人と話すことが苦手で、当たり前のようにできなければならない人との会話や交流を恥ずかしさから避けていた自分がいました。そんな自分を改善したい、もっと他者の文化や考えに寄り添える人間になりたいと思ったことが留学を後押しするきっかけとなりました。

3. その大学を選んだ理由

一番の理由は台湾の国立政治大学は文系大学の名門校であり質の高い語学教育を受けることができると考えたからです。政治大学と聞くと政治を勉強する場所なのかと当初は考えましたが、政治だけではなく台湾史をはじめとした歴史科目や外国語を用いて海外諸国の文化について学ぶコミュニケーション科目など幅広い文系科目を学ぶことができ、法文学部の自分にぴったりの大学だと感じました。

また国際交流が豊かで外国人留学生が多いことも特色の一つです。インドネシアの学生やフランス・ドイツ・チェコなどのヨーロッパの学生など世界各国から来る留学生と共に学習できることに魅力を感じました。中国語だけではなく英語でもコミュニケーションが取れるということが当時の自分にとってありがたく、台湾留学前の不安を払拭してくれる長所でもありました。

4. 留学先で学んだこと（授業の様子）

留学中は前期と後期に分かれていて、それぞれ 15 クレジットずつ取っていました。授業時間が日本とは異なり一科目の時間が 2～3 時間ということもあり前期は 6 科目、後期は 5 科目受講していました。

前期では主に歴史科目を取っていました。特に東アジアや東南アジアの国々の歴史や文化を中心に学びました。しかし東アジアの仏教文化について学んだりアメリカ合衆国の歴史を学ぶなど自分が興味を抱いた国の歴史を自由に学ぶことができ、世界の情勢や国家の多様性に関する理解を深めることができました。授業の言語がほぼ全て英語で行われていたことに加え授業後にはパワーポイントを共有してくださったため先生の言葉やクラスメートの質問などを聞き取ることができ、より詳しく授業内容を復習することができました。評価基準として授業の出席の他に中間考査や期末レポートがありましたが、他にも当時の一次資料を引用したうえで 7～10 枚の小論文を作る、事前に見たニュースの内容を要約してグループ同士で発表する、テーマを選んで 5～7 分の動画を作成するなど日本ではあまり見られない課題もありました。事前の勉強をしても難しいと感じるものもありましたが、1～2 週間前から対策していたことや台湾人・日本人を含む周りの留学生の助けもあり無事成し遂げることができました。

前期で印象に残った授業は「タイの文化信仰」や「インドネシアの社会と文化」です。前者の授業では座学に加えタイの伝統的な舞踊を踊る、歌を聞いて実際に歌うなど楽しみながら文化体験をすることができました。また後者の授業では先生が持って来てくださった食材を用いてインドネシアの伝統的な料理をクラスメート同士で作ってみようという企画がありました。普段あまり話さないクラスメートとも英語で相談しつつ自分の出身の国の話で盛り上がりながら協力し合うことができました。どちらも政治大学ならではのユニークな授業で日本の大学だけでは得られない文化的な知見を得ることができました。



「タイの文化信仰」の授業



「インドネシアの社会と文化」の授業

後期では中国語を重点的に学びました。具体的には「Mandarin Intensive Courses」という中国語集中学習コースで毎週月曜日から木曜日にかけてスピーキング・リスニング・リーディング・ライティング4つの授業をくまなく受けました。授業内容は比較級やイディオムなど文法に関するものが主で、日常生活での会話をベースとした難易度でした。それぞれの授業で同じ担当の先生が中国語の教科書とは別にテキスト資料を使って解説してくださるためじっくりと中国語を学ぶことができました。わからないことがあっても先生がその場で教えてくれるだけでなく次の授業の冒頭で復習してくださるため苦手分野を克服しながら勉強することができます。集中できることに加え着実に中国語を身に着けているという感覚を維持して学習できるため自信をもって授業に臨むことにも繋がり中国語の能力を大幅に伸ばすことができました。

中国語の授業では座学の他にフィールドトリップという日帰りの研修旅行が2回ありました。

1 回目の研修旅行では淡水(ダンシュエイ)という台北の北西部に行き観光スポットを授業のメンバーで巡ったり、老街(ラオジエ)と呼ばれるレトロな街並みにいる人々にインタビューをしてみるといった活動を行いました。授業で習ったばかりの中国語を台湾人相手に話すことには最初こそ戸惑いや抵抗がありましたが、相手の方も親切に話を聞いてくれるため気負いすることなく授業を楽しむことができました。

2 回目の研修旅行では木柵(ムージャー)と呼ばれる大学付近の地域に赴き台湾名物の臭豆腐(チョウドウフ)を作ったり、地元の神社に参拝しおみくじを引くなど台湾のローカル文化をじかに体験することができました。台湾は独自の神様を祀っていることでも有名なため日本の寺社仏閣との信仰物の違いも非常に興味深く、それが古い文化にも表れているため台湾の宗教文化を知りたい方にはぜひおすすめです。



中国語の授業の様子



フィールドトリップの様子 淡水
紅毛城(ホンマオチャン)観光



フィールドトリップの様子 淡水
授業メンバーとの集合写真



フィールドトリップの様子 木柵
臭豆腐作り

5. 現地での生活 寮生活について

留学中私は山の上にある自強五舎という寮に住んでいました。この寮には日本だけでなくヨーロッパ・アメリカ・中国・香港・中央アジアなど様々な国から来た学生が住んでおり、国際交流を深めたい学生同士がそれぞれ4人部屋で共同生活を送るというシステムになっています。

まず寮の部屋の設備について述べます。それぞれ部屋の中にはベッドのフレームやマットレス、机、椅子、本棚、ロッカーが備え付けられていました。天井の照明の隣には無料で使える扇風機があることに加え500元(日本円で2500円)のプリペイドカードを買えばクーラーを使うこともできたため台湾の暑い夏を快適に過ごすことができました。布団やシャンプーといった生活用品、延長コード・LAN ケーブルといった機械類など生活に必要なものは隣の寮である自強九舎内のコンビニで買いそろえることができるため不便さはあまり感じませんでした。

寮内には共同のキッチン、ロビー、シャワー、トイレ、自動販売機、リサイクル用ごみ箱、洗面台、有料の洗濯機・乾燥機がありました。キッチンにはIHコンロと皿などの食器、鍋やフライパンなどの調理器具が置いてあったためたまたま日本人留学生と共に餃子やラーメンを作るなど自炊を楽しんでいました。またロビーにはソファ、長机、テレビが置いてあり外国人留学生が映画を見たり麻雀やポーカーといったテーブルゲームをしていたため夜でも賑やかな雰囲気でした。ゴミを捨てる時間が決まっていたり、洗濯機や乾燥機は各フロアに2個ずつのため洗濯を回す時間には配慮しなくてはならないなど共同生活故の窮屈さや不便さもありましたが、相手への気遣いや生活力を育む良いきっかけとなったと思います。

寮での生活は良いことだけではなく些細なトラブルも多くありました。当初は寮の部屋が4人部屋だったということもあり、ルームメイトとの生活面での違いで戸惑いが見られました。例えばチェコから来たルームメイトが夜の9時には電気を消して眠るためこちらも早めに風呂に入り寝る支度を済ませておかななくてはならないといったことに加え、私が使っていた物干しやサンダルを勝手に使われる、私の机に無断で物を置かれるといったこともあり、ストレスを感じたり共同生活への不安が増幅し若干神経質になった時もありました。ルームメイトの一人が部屋の方々に洗濯ものや靴を散らかしたり、冬に22度の

クーラーを付けていた時も生活の価値観の違いとは言え、もやっと感じた出来事でした。

しかし時間が経つにつれルームメイトと話すことも多くなり、嫌なことを嫌だとかまめに相手に伝えることができるようになりました。お互いに話し合って妥協点を見つけることでようやくお互いが苦に感じない共同生活を達成できたように思います。言語の壁もあって相手にうまく伝わらない時はジェスチャーや表情といった非言語も活用しながらわかりやすい英単語の言い換えによって相手に伝えるのが効果的であると今は感じています。異文化であるため分かり合えないと思うのではなく、とりあえず言葉に出して相手に伝えてみよう、相手側の考えも聞いてみようとする態度が人との共存において大切であると再確認できた出来事でした。



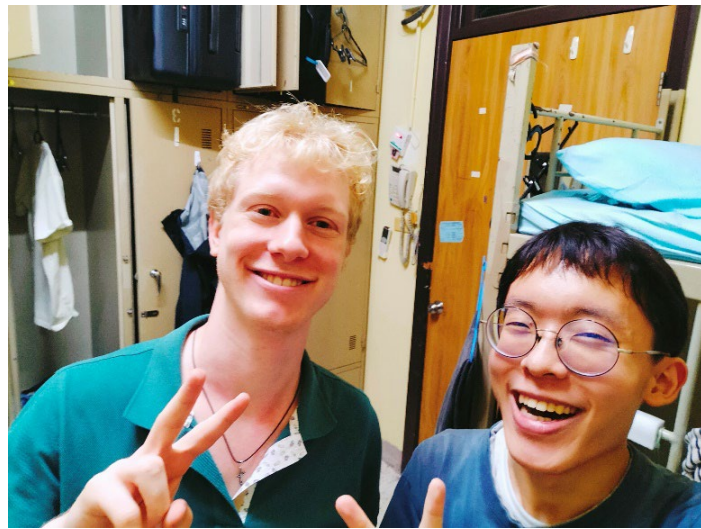
部屋の設備の様子1 ドア側から撮影



部屋の設備の様子2 室内側から撮影



部屋の設備の様子3 机と本棚



留学最後ルームメイトと一緒に

余談となりますが寮の近くには2元(10円)で乗れる構内バスが走っています。「山居學習書院」というバス停から大学までおよそ10分で行けるため格安で大学通学することができました。

また大学内には中正圖書館と呼ばれる巨大な図書館があり、レポート作成に使用する参考文献を借りられるほか24時間利用可能な地下学習室で勉強することができました。台湾の書籍だけでなく英語の文献、日本語の文献も数多く保管してあるため、授業の復習や調べ学習においてかなり役に立ちました。こうした充実した公共施設も政治大学の強みであるといえます。



中正圖書館の正面写真

6. 現地での生活 食事について

留学中に食べた台湾料理はどれもおいしかったです。日本料理とはまた別に肉やスープなどの味付けがこだわられていたため満足できました。基本的には一日二食で生活していましたが、留学後半から友達に誘われたこともあり、筋トレの食事管理の一環で食べる回数を増やしたり、ご飯や肉を多めに食べるなど栄養配分にもこだわるようになりました。

特に寮が山の上でバスが来ない時は下りづらいこともあり、よく寮の側のカフェテリアを利用していました。カフェテリアには弁当や鶏肉丼、ラーメン、パスタ、サンドイッチ、ウーロン茶、餃子など色々なお店があったため、飽きることなく日頃の食事を楽しむことができました。とりわけ弁当屋ではお肉や野菜をバイキング形式で選ぶことができるため自分が食べたいものを自由に選んで食することができました。店の人が気さくで頼めばご飯を無料でお替りしてくれるためたくさん食べたい時にはよくサービスしてもらいました。80元(400円)という安さもあり学生からも地元の台湾学生からも人気でした。

また授業で忙しくすぐにお昼ご飯を食べなくてはならない時は大学付近のレストランによく行きました。「美香味快餐」というお店では60元(300円)で焼きそばやチャーハンを食べたり70元(350円)でト

ンカツ定食を食べることができ、上記のカフェテリアと合わせて留学中は頻繁に通っていたように思います。留学で一番心配だったのは食費だったのでお手軽にたくさん食べられる飲食店が大学近くにあることは経済面においてもすごく助かりました。

余談となりますがこの他にも「滷肉飯(ルーロウファン)」や「鶏肉飯(ジーロウファン)」など台湾のソウルフードを安くで食べられるお店が大学付近にあります。政治大学の存在する文山區はお茶がおいしいことでも有名であるためウーロン茶なども格別で食べる・飲むことにおいて事欠きません。勉強しながら身近なグルメを楽しみたい方には非常におすすめなスポットだと言えます。



カフェテリアの鶏肉丼(カスタード入り)



カフェテリアのベーコンパスタ



「美香味快餐」の焼きそば定食



鶏肉飯 (大学付近のお店)

7. 留学先での実体験 ―楽しかったこと・辛かったことを交えて―

留学でやはり楽しかったことは外国人留学生との会話や台湾人との交流でした。授業の中での会話だけでなく授業後に一緒にお昼を食べたり、期末発表のリハーサルのために授業外に集まるなど留学では一見何気ないことも日本に帰った今思い返してみればそれがいかに貴重であったか気づかされます。留学して最初の一か月間は台湾での生活になれなかったことに加え、授業内容を理解することがまだ難しく自分の言いたいことがクラスメートに伝わらなかった時にはその度に落ち込んでいました。しかし諦めることなく復習したり授業に積極的に参加することで環境に適応していくことができました。周りの助けも借りながら、人との繋がりを意識することで自分は孤独ではないと安心できました。そしてその時にできた縁が日本にいただけでは得られない世界との繋がりであり、留学はそうした縁を結ぶ国を超えた交流の機会であったと、振り返る度実感します。

特に自分にとって一番ありがたいと感じた出来事は台湾人の友達(以下、彼と呼びます)ができたことです。きっかけはインドネシアの授業で一緒になったことで、彼が日本の文化に興味を持っていたこともありすごく話が弾みました。驚かされたことはただ興味を抱いているというだけではなく、日本の文化を知るために日本語をペラペラになるまで独学で勉強してきたという彼の努力でした。いかに日本を知るために必死になっているかということに気づかされた時、私が留学に来た目的を思い知らされました。彼は私のために週 1 回中国語を教えてくれる機会を設けてくれ、ノートにわかりやすく重要語彙をまとめてくれただけでなく、その発音なども丁寧に教えてくれました。休憩の合間には日本語でアニメや漫画の話をして盛り上がっていました。授業で中国語を学ぶだけでなく、授業外に彼と学ぶことで一層中国語を伸ばすことができたように思います。

一方寮では外国人学生があまりにも多かったことに加え、気づけば外国人同士が集団で集まっていたこともあり、なかなか声をかけられず彼らの輪に入ることができませんでした。その原因はあまり仲良くない人物に話しかけることが気まづかったことに加え、自分の英語が上手でないこともあり恥ずかしかったからです。しかし1年間共に生活をする中で次第に私の方から「Hello!」と挨拶したり、相手に質問したりすることができるようになりました。もちろんレポートがあつたり授業が忙しい日には長々と話すことはできませんが、時間を気にしすぎず、わからない英単語が出て焦ったりせず、会話中は相手の話を聞こう、相手との会話を楽しもうと努めるようにしました。そうしていくうちに気づけば自然と相手の話に耳を傾けて会話することができるようになっていました。当時苦手だったルームメイトでさえも留学の最後には仲良くなっていました。

言語の壁があろうととにかく相手に伝わるように自分の持つ知識をフル活用して話してみること、逆に相手の話に耳を傾けて何を話しているのか理解しようとする。どちらも大切なことですが、その根幹には相手の文化への好奇心・興味があると私は考えます。そしてその中で学んだ大事なことは、それは挨拶がコミュニケーションを始めるうえでの魔法の言葉だということです。どんなに言語が分からなくても挨拶であれば必ず相手も理解することができる。何より挨拶をすることこそが相手とコミュニケーションを取りたいという意思表示であるということ。それを彼や他の台湾人、その他の外国人留学生と交流する中で自ら気づくことができました。そして相手と話してみようとする勇気と話を聞こうとする心の余裕を持つことが相手と滞りなくコミュニケーションを楽しむ秘訣であると今もなお考えています。

補足となりますが、外国人学生だけではなく日本人学生とも交流したいと考え、台日交流会や日本友会

に所属していました。これらのサークルでは週 1 回ゲームや雑談などを通じて日本語や中国語を鍛えたり、人脈を広げることができました。月に一度大きなイベントがありその時にはダンスをして踊ったりクイズ大会をしたりなどパーティーのように和気あいあいとした雰囲気でした。

サークル活動以外でも仲良くなった日本人留学生と夜市(イエスー)にお出かけに行ったり、マンゴーかき氷を食べに行ったりしました。台湾は夜市というナイトマーケットがあることで有名で、大規模で観光客向けの物からローカルなものまで幅広くありました。中でも士林夜市には雞排(ジーパイ)という巨大なフライドチキンを売っている店があり、食べ歩きをしながら台湾の人々の生活を間近で体験することができました。マンゴーかき氷は特に夏が旬で、雙連(シュアンリエン)という地域にある「冰讚(ビンザン)」というお店が観光客に最も人気があり個人的におすすめです。留学後半では同じ 1 年間の日本人留学生と一緒にジムに行ったり、バドミントンに行ったりなどプライベートにおいても健康的で有意義な留学生活となったかと思います。



夜市の様子



士林夜市の前で日本人留学生と



日本人留学生とマンゴーかき氷を食べに冰讚へ



台日交流会の様子 台湾人の友達との集合写真

また留学から帰る前に台湾を1周してきました。旅行の目的は台湾に存在する4つの考古博物館を巡ることです。淡水の十三行博物館や台南の國立臺灣史前文化博物館 南科考古館、台東の國立臺灣史前文化博物館 康樂本館、花蓮の花蓮縣考古博物館。この4つは日本の縄文・弥生・古墳時代に当たる台湾史の博物館であり、台湾の民族の暮らしや古代文明を知ることができます。日本の愛媛大学では考古学を専攻していることもあり留学前から興味があったので、台湾のローカル鉄道や高鐵(新幹線のような乗り物)を使って2泊3日の旅行に行ってきました。巨大な博物館の中に石器、鉄、土器とエリアごとにわかりやすく区分されており、また一つ一つの展示品がかなり精巧に作られた歴史的価値のある物だったため、留学最後の良い思い出となりました。



淡水 十三行博物館 展示の様子



台南 南科考古館 展示の様子



台東 康樂本館 展示の様子



花蓮 花蓮縣考古博物館 展示の様子

8. 終わりに

一年という期間は長いようであつという間でした。衣食住のすべての観点から評価してもかなり居心地がよく正直に言えばもうあと一年滞在したいと思ってしまうくらい本当に良い場所でした。人種・性別問わず良い人脈に恵まれたこと、幅広く学べる勉強の機会を与えられたこと、今も忘れられません。高校生時代の自分は海外留学など考えもしなかったのも、まさか 2 年後に台湾に留学しているなど夢にも思わなかったと思います。貴重な体験をいっぱいして日本に帰ってくることができました。

この留学では自分自身を成長させることができました。そこで重要となるのはやはり言語でしょう。人間にとって歴史ある産物であるのにあまり目立たず、自分の国にいるうちはそのありがたみにさえ気づくことは少ないと思います。それは日本人にとっての日本語だけではなく、英語や中国語など第二・第三の言語についても同じことが言えます。ただの座学だけでは世界の言語が持つ価値など教科書の中だけで終わってしまうからです。しかしもし自分の目で世界を見たくなった時、自分の知らない世界をもっと知りたくなった時、人間は学習に深い価値を見出すことができます。言語を使ってコミュニケーションをする、ただ何気ない当たり前の行為に喜びを感じることもきっとできると思います。台湾への留学、並びに海外留学や語学の勉強にもし興味のある方がいれば、あるいは興味のない方にも、ぜひ始めて見ることをおすすめしたいです。好奇心を持って一步踏み出すことはなかなか勇気のいることです。自分が思っている以上に自分がしたことのないことをするということは抵抗もあり、どうしても迷った末に諦めてしまいがちになります。しかしそこで諦めないでほしい。わからないことがあればたった一声誰かに声をかけて話を聞いてみてほしい。そうして誰かと話をするのもコミュニケーションの始まりであり、言語の世界を知るきっかけとなると私は信じています。

留学は言語の世界を知る扉のようなものです。私はこれからも言語について趣味の中でも学び続けていきたいと思っています。台湾だからこそ学べたこと、国立政治大学だからこそできたこと、そしてそこでできた人との縁。それらを忘れてしまわないように、10 年後の自分が留学に行って良かったともう一度言えるように、残りの大学生活を大切に送っていききたいと思っています。

最後となりますが実りある留學生活を送ることができたのは私を支えてくださった留学生・先生の方々、そして留学を陰から常に支援してくださった国際連携支援部の皆様のおかげです。重ねてとはなりますが、この度、台湾への長期留学を後押しして下さりまことにありがとうございました。これを持ちまして留学のご報告といたします。